

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32404

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13532

研究課題名（和文）近代初期の言語生活と言語教育の研究 - 「かなのくわい」における実験と展開 -

研究課題名（英文）The Linguistic Aspects of Life and Language Education in The Beginning of Modern Period

研究代表者

田鍋 桂子 (tanabe, keiko)

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30700223

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000 円

研究成果の概要（和文）：各地の「かなのくわい」の資料を収集し、資料のデータベース化を行い、先行文献を検証し、会の活動の実態について明らかにした。幹部、分裂の経緯、会員数の推移、地方支部、をんな組の存在、かなを用いた運営、かな主義を中心としながら、言文一致に基づいた教育をめざす「かなの学校」の实在、機関紙の文体について明らかにした。

「かなのくわい」は、かな専用主義にとどまらない、実践をともなう運動であった。知識人の啓蒙に一般人や地方の知識人と見られる層が呼応しあって運動が展開された。多くの分野の試みが渾然となされ、その限界が示された。

「かなのくわい」はそれぞれの専門の分野につながる壮大な実験場であったと結論づけられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「わかりやすい、伝わることば」につながる思想をもった、近代最初の実験的な教育的社会的試みとして、これからの言語教育と日本語を実証的に再考できる。

また、「かなのくわい」所属の人物の著述は、それぞれの分野で別個に利用されてきた。本研究により各々の分野の研究も進められる他、多様な思想背景・専門分野を持つ人々が、一時的に大同団結した理由と歴史的意味を明らかにすることで、学際的な研究への発展も期待できる。さらに、言文一致の確立以前の研究資料は質・量とともに不足している。「かなのくわい」の資料は時期においても資料の性格においても希少である。

研究成果の概要（英文）：I collected the materials of “Kana no Kwai (The Society of Kana)” from many places, I made database of it, verified previous researches and clarified the reality of their activities.

“Kana no Kwai” is not only focusing on using Kana, but also its activity was done with practice. I concluded “Kana no Kwai” is a huge proving ground which connects to every special area.

研究分野：日本語学

キーワード：国語国字運動 言文一致 啓蒙主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「かなのくわい」は明治前期に仮名専用を訴えて日本語の改革をめざした結社であり、言文一致の草創期に、洋学、国学と多様な思想背景を持った知識人と実業家が、新しい書き言葉の構築を目指して、1万人とも言われる一般人を巻き込んで日常言語生活の中で展開した今日では再現不可能な「実験的プロジェクト」である。先行研究は、日下部(1931)、山本(1965)に拠るところがほとんどである。日下部は国語国字運動、漢字廃止運動の一つとして「かなのくわい」の活動をとりあげた。しかしながら、昭和初期の研究であり、典拠等が一切示されず、利用がしにくいというらみがあった。また、山本においては、「かなのくわい」の活動と言文一致について詳細に論じられているが、資料の大半が一般に知られてないことから大半が紹介解説にとどまった旨がしるされている。

2. 研究の目的

本研究の具体的な研究項目は、資料の全体像の明示、活動と組織の具体的説明、会での日本語の使用実態の調査分析、会による言語教育の方法と手段の説明、会員の日常言語生活の実態調査、思想背景の分析、まとめとしての、会の拡大と消滅の原因分析である。

3. 研究の方法

研究の進め方として、「かなのくわい」の資料の収集・整理、発行雑誌のデータベース化、活動と組織の具体的説明、試みられた日本語の特徴の説明、言語教育の方法と手段の具体的説明、言語についての規範の分析、主要会員の思想背景の分析、会の拡大と消滅の原因分析を分析して、歴史的意義を明らかにするという手順で行っていく。

4. 研究成果

会の概略について、日下部(1933)、山本(1965)の記述を資料によって典拠を明らかにしつつ検証した。「かなのくわい」の起こりは、明治14年の10月ごろに吉原重俊、高崎正風、西徳次郎、有島武の4人であり、そののち、福羽美静、近藤真琴、高橋新吉、丸山作楽、池原香榊、物集高見の6人が加わり、引き続き大槻文彦、那珂通世が加わり、「かなのとも」と名付けた。15年の6月に内田嘉一と片山淳吉が加わり、その後、宮崎蘇菴、清水卯三郎、大井鎌吉、南部義篤が加わった。

明治16年7月に同じ仮名論をとる団体と合同して「かなのくわい」となり、花、月、雪の三部に分かれる。「いつらのこゑ」について、詳細が不明であったが、人数は10人に足りないほどで、その主張は、五十音をただし仮名文字を増す、とあるので、音義派の人々であったことも明らかとなった。

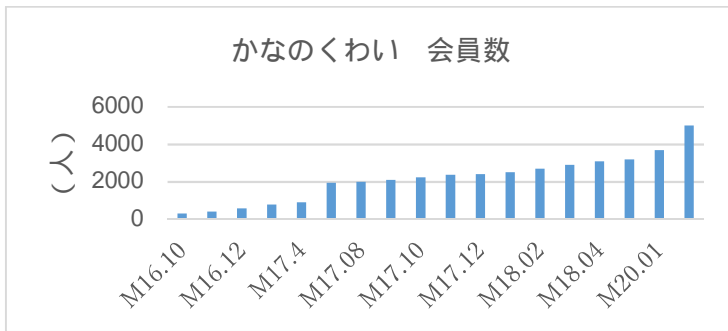
さらに、会の分裂の経緯を具体的に明らかにした。明治18年5月25日の評議員会で、いわゆる旧仮名遣派が、会の仮名遣いを統一する旨を定めた。仮名遣い改良推進派は、3日後の28日に臨時評議会を開き、25日の決定に反対する何らかの議決をした。その結果、両派の溝は決定的となり、会長の有栖川宮威仁親王に相談の上、副会長の鍋島直大が会の分裂を決定した。25日の決定から分裂宣言の6月1日までわずか1週間ほどの日数しかなく、両者の主張の違いがもともと乗り越えがたいものであった。

会の目的は、日常の文章にかな文字を用いることであったが、山本(1965)で指摘のごとく、言文一致については明示されておらず、『かなのざつし』の規則のみに言文一致の志向が明確に記されている。

しかしながら、他の雑誌の約定と比較した結果、文字のみではなく、用いる言葉の平易化が謳われており、「言文一致」という用語で明言しているのは『かなのざつし』のみであるが、最初の『かなのみちびき』から、同じ系統の『かなしんぶん』では、単に「解しやすいくこと」から「耳に入りやすい」ことに訂正がなされている。書き言葉を音声言語の点から見直そうとする意図が明治10年代の後半から古典仮名遣いを掲げる「もとのとも」にも見られる。

機関雑誌についても、5種類の公的雑誌と1種類の新聞のほかに、ほとんど知られていなかった『あいらかなしんぶん』という新聞が発行されていたこと、新たにその新聞の内容及び編集人、発行について明らかにした。構成は『かなしんぶん』と同様で、冒頭に副会長の鍋島と吉原の名で会の趣旨をひろめるために新たに発行の旨を述べている。書き手、編集人は宮崎蘇菴である。たびたびの発行延引があり、発行は思うに任せなかった。

明治21年までの会員数を明らかにした。明治16年10月15日には304人だった会員は月に100名程度の増加が見られ、会が統一された明治17年7月には1936人、明治18年7月に会が分裂したのちの資料では、本部(つきのぶ系統)に属する会員が3680人、「かきかたかいいりやうぶ」の会員が千数百人、全国の支部をあわせれば1万人という報告がある。また、明治22年5月の「おほよりあひ」では、事務方の報告として、会の成り立ちと会員数等についての資料付きの報告がなされ、分裂前は総会員3310人であり、分裂後「かきかたかいいりやうぶ」に属した会員は1356人、「もとのとも」は1954人であったという。「もとのとも」は明治21年12月では5009人であったとし、地方会員も合わせると1万人の会員が従事するとしている。



注) 分裂後はつきのぶ系統(もとのとも)のみの数値である。

会の当初より地方での運動を進める意図があり、実際に地方に多くの支部と会員が実在していたことを明らかにした。また地方支部とは別に「をんな組」という組織も作られていた。地方支部もそれぞれ会則をもち、機関紙を発行していた。明治22年5月の『かなのてかゞみ』35号の「じむのほうこく」によると、地方の会と会員数は合計1890人程度いた。「よこはまぐみ」の活動がもっとも活発であった。地方支部がそれぞれの支部で刊行した雑誌名は以下の通りである。「かなのみなと」(よこはまぐみ)、「みやぎくみのしらせ」(みやぎのくみ)、「むつのはな」(みやぎぐみ)、「きろくのぬきがき」(はままつぐみ)、「はぎのしをり」(はままつぐみ)、「いそのもくづ」(こゆるぎぐみ)、「あまがさびずり」(みうらぐみ)、「かなのくわい つきなみしふ」(いせぐみ)、「はつくさ」(ぎぶぐみ)、「つゆのしたくさ」(うつのみや かなのまとゐ)、「かなのしんぶん」(いろはぐみ)であった。

女性会員も当初の『かなのみちびき』の頃から存在した。をんな組の会員は、明治22年5月には数百人いた。

中央の一部の知識人の運動ではなく、地方や女性まで含めて全国に展開する国字運動であることが「かなのくわい」の一つの特徴であるといえる。

全ての期間の幹部会員を機関雑誌によって明らかにした。『かなのみちびき』の第1号から第12号まですべて幹事として記載されているのは、内田嘉一、大槻文彦、片山淳吉、清水卯三郎、高崎正風、宮崎蘇庵、物集高見、吉原重俊の八名で、彼らが実質運営者であった。

なお、初期の会員については特に多様な人脈が見られる。例えば仮名論者とは主張を異にするローマ字論は、明治初年から南部義籌・西周らによって唱えられ、同十八年には羅馬字会が成立し、いわゆるヘボン式ローマ字の綴り方を採用したが、南部も西も『かなのみちびき』会員に名前が途中まで見られる。西に関係する人物としても、西とオランダに留学し共に学び明六社同人でもある洋学者の津田真道、「日本文法書ヲ作ラントスルノ議」で口語文法書編纂の必要性を説き、西周の「日本語典」巻一を書写している国学者の福羽美静、リンネの植物学を最初に日本に『泰西本草名疏』の名で紹介した伊藤圭介、『附音・挿図英和字彙』の出版でしられる子安峻、英語教育学のリーダーとしてしられる神田乃武などである。

一方、「ゆきのぶ」では「つきのぶ」と共通の会長、副会長のほか、幹事として常議員(じやうぎあん)をおいていた。明治16年7月に、主務幹事を丹羽雄九郎、幹事を波多野承五郎、名児耶六都、小西信八、の三名を置き、そのほか、伊藤欽亮、濱野定四郎、本多孫四郎、岡本利兵衛、高嶋小金治、辻敬之、那珂通世、中上川彦二郎、名越時孝、真中直道、後藤牧太、朝夷六都、三宅米吉、肥田濱五郎、本山彦一、鈴木千巻が常議員であった。

分裂後の旧「つきのぶ」が発行の『かなのてかゞみ』は、第1号から最終号の第57号までの幹事の異なり人数は23人で、会長の有栖川宮と副会長の鍋島と吉原を別にすると20人の幹事が『かなのてかゞみ』の運営に実質的に携わっていた。8号から20号までは、雑誌も盛んで、幹事も多いが、21号以降、幹事的人数は8人程度となり、高崎正風、元田直、内田嘉一、大槻文彦、平井正俊、松野義雄、林四郎、橘良平となる。物集高見、小中村清矩、宮崎蘇庵といった前半に活躍した人々の名前が消えている。最後の56号と57号については高崎正風、元田直、内田嘉一、大槻文彦、飯島誠の五人のみである。

全期を通して幹事として名前が挙げられているのは141人である。これらの幹部のうち、井上頼園、大槻文彦、神田乃武、後藤牧太、小西信八、清水卯三郎、名児耶六都、林茂淳、松村任三の9名は、のちの言文一致会の会員にも名を連ねており、一貫して国語国語の変革をめざしていく。この中の大槻文彦は国語調査委員会主査委員、臨時仮名遣委員会委員ともなっており、表音式の表記および言文一致を主張する。明治前期の短い時期に起こり衰えたと言われる「かなのくわい」が明治の国語国字運動に多大な影響を与え続けていたことが明確となった。

また一般会員の中には、『雅俗文法』(明治10年8月)を著した里見義、後の国語調査委員で日本語の仮名字体の通史的研究や五十音図の研究で有名な大矢透も見出され、大矢は独自の論を展開していることも指摘した。

これまで存在も実態も不明であったかな学校の実在を証明した。明治20年12月1日に開校式を東京九段坂下俎橋わきの玉川堂で行い、校長にあたる「をしへおや」が宮崎蘇庵であった。また、九段下の学校のほかに新宿区の牛込に女子のみの学校を設立している。学校の目的としては、仮名を用いることで教育を容易くし、実業へつかせることとし、学ぶ方法として「なるべくことばとぶんしやうとを一やうにすることをむねとし」とあり、言文一致の教材によって教育を進めようとした。明治22年11月までは確かに存在が確認できた。また、明治23年までは学校が運営されていた可能性もある。

「つきのぶ」、「ゆきのぶ」、それぞれの口語文の記事における文体の調査し明らかにした。

「かなのくわい」機関紙は明治16年5月から明治24年3月までの8年弱であり、記事の本数は合計で約1400に及ぶ。

	記事 (%)	文語 (%)	口語 (%)		記事 (%)	文語 (%)	口語 (%)
かなのみちびき (明治16.05-17.03)	100.0	98.8	1.2	つきのぶ	100.0	89.8	9.7
かなしんぶん (明治18.07-19.06.15)	100.0	87.7	12.3				
かなのてかがみ (明治19.07-24.03)	100.0	89.9	9.2				
かなのまなび (明治16.08-M17.06)	100.0	100.0	0.0	ゆきのぶ	100.0	100.0	0.0
かなのざつし (明治18.07-19.01)	100.0	100.0	0.0				
かなのしるべ (明治17.07-18.05)	100.0	91.1	8.9	合同	100.0	90.3	9.7
合計	100.0	91.2	8.8		100.0	91.0	8.6

山本(1965)は三誌上の仮名文は、擬古文調のなりけり式の文章が90%以上を占めていたとする。三紙すべての合計においては、山本の指摘通りであった。ただし、つきのぶとゆきのぶについては相違が見られる。つきのぶ系統の「かなしんぶん」では口語体の記事の割合は12パーセントを超えるが、同じくつきのぶ系統の「かなのてかがみ」では10パーセントをわずかに切る。

「かなのくわい」の機関紙を通してのもっとも早い口語体の記事は、山本(1965)も指摘した通り、『かなのしるべ』における、明治16年12月22日の「かなのくわい」のをさめの会での片山淳吉による「かなのくわい」の起こりについての演説である。その後、「かなのくわい」誌上に次々に、林の速記による口語体の演説が掲載される。林は、速記のみではなく、言文一致や、国語に関する論も「かなのくわい」誌上で展開しているが、「かなのくわい」の活動時期は、速記が実用化される初期にあたり、「かなのくわい」での活動が、林の技術の向上や日本語に対する認識を深めていく一助となったことは疑えない。

また、『かなのしるべ』では、一般会員からの口語体の記事がすべて仮名文を主張する文章であることも新たに指摘した。『かなのしるべ』においても、記事の内容は投書ですら百科的な知識や小断などさまざまな内容のものが見られる。ところが、口語体の文がすべてかなの主張に関するものであるということは、一般会員が中央の有名な会員の演説に触発されて、内容はさておき、演説に模して同じ仮名文を主張する文章を、口語体で書くということをはじめたもので、一つの型のようなものが意識されたと考えられる。

『かなのしるべ』から「かなしんぶん」へは口語体の文章の内容に大きな変化が見られるといえてよい。上述の演説が想定されるような、かなの主張のみでなく、さまざまな読み物を口語体で投稿するという流れができていく。その流れはさらに「かなのてかがみ」に広がっていく。「かなのてかがみ」では、林や片山等といった「かなのくわい」での言文一致の急先鋒を務めた中央の知識人だけではなく、地方在住の一般会員へ広がり、それらの一般会員からまた知識人へと連環していく。

明治22年以降、かなの主張については新鮮味が薄れ、啓蒙的な内容が読者に受容されなくなり、簡便な「おもしろさ」を求めて編集方針を変更するも、求心力の低下はとどめることができなかった。また、主力会員がこの頃相次いで死去した事、別の場所に活動の場をうつしていった事も「かなのくわい」の消滅の原因となった。

しかしながら、「かなのくわい」運動は、かな専用主義にとどまらない。言文一致、方言と標準語、口語文法、教育(教科書編纂・実技教育・道徳教育・女子教育等)という多方面の分野について、専門的に分化しないまま、多くの試みが渾然となされた。当時の啓蒙主義を背景に、かな文字のみの使用という単純で明快な構造があればこそその多様性ではあったが、かな文字専用の限界はもちろんで、かな文字でつづる一つ一つの表記と文体は、明治二十年代の前半で

は、それらの思想を盛るだけの十分な中身とコンセンサスは得られず、会の自然消滅という形でその限界が示された。しかし、「かなのくわい」の会員の一部はのちの言文一致会、さらには国語調査委員会に連なる人物もいる。また、会の消滅後の会員の活躍も多岐にわたる。「かなのくわい」は、それぞれの専門の分野に確かにつながる壮大な初期の実験場であったと結論づけられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田鍋桂子	4. 巻 24
2. 論文標題 「かなのくわい」の活動について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明海日本語	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田鍋桂子	4. 巻 10
2. 論文標題 「かなのくわい」の活動（2）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語論叢	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田鍋桂子
2. 発表標題 かなのくわいと辞書 大槻文彦編纂『日本辞書言海』を中心に
3. 学会等名 日本語論叢の会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----